

関係人口を^い活かす地域の寛容性

選挙のため、しばらくお休みをいただいていたコラムを再開します。題を「市長どっとコム」から「高松さんぽ」に変更させていただきました。引き続き、高松市政に関することや日々の生活の中で感じたことなどを気ままに綴ってまいります。

今上天皇が即位され、新しい「令和」の時代が始まりました。そして、それをお祝いするかのように開幕したのが瀬戸内国際芸術祭2019です。この原稿が出る頃には、盛況のうちに春会期が終了しているものと思います。4回目の開催となった今回は、急増した前回にも増して外国人の参加、来場が多くなっているように感じます。高松空港の国際直行便が充実してきたことと、著名な欧米メディアで芸術祭が開催される瀬戸内の地域が高評価で取り上げられ、知名度が飛躍的に高まっているせいでしょう。また、前回も約4割にのぼったリピーターが今回も多いように思われます。3年に一度の開催に合わせて、全国各地域から、まるで故郷に帰省するように瀬戸内の島々に帰ってくる人たちが確実に多数存在するというのも、この芸術祭の大きな特長です。

人口減少が本格化する中、定住人口や単なる観光に来た交流人口とは異なる、その地域と何らかの関わりを持つ関係人口を増やしていくことが必要かつ重要である、という議論が自治体関係者の間で盛んに行われています。芸術祭の運営を実質的に支えているボランティアサポーター「こえび隊」をはじめとして、アーティストを含め芸術祭に集う多くの人たちは、この地域の未来を共に創造していくべき関係人口そのものと言えるのではないでしょうか。

その地域に興味を持ち、さまざまな関係性を有する人たちが増え、しかもそれが海外にも広がっていくことで、地域の未来が今よりも明るく具体的な姿を表してくるはずですが、重要なのはストレンジャー（よそ者、異邦人）の多様性を受け入れ、活躍の場を作ることができる地域の寛容性であると確信しています。

